嫌妻権（けんさいけん）

田辺聖子

嫌妻権（けんさいけん）

田辺聖子

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
（郵便番号112）
光文社　文芸編集部

嫌妻権

一九八六年九月三〇日　初版第一刷発行
一九八七年三月一五日　第四刷発行

著者　田辺聖子
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三／郵便番号112
電話　東京(〇三)九四二—二二四一(代)
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　慶昌堂印刷
製本所　榎本製本

定価　九八〇円

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　© Seiko Tanabe 1986
ISBN4-334-92131-0　Printed in Japan
日本音楽著作権協会許諾番号　8661052-604号

目次

嫌妻権(けんさいけん)について　5
刺身(さしみ)はタマリで　43
おすすめ気晴らし　79
ボケの花　113
ルンルン離婚　149
たそがれの天神ひげ　181
たすかる関係　213

装幀　灘本唯人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

嫌妻権

田辺聖子

嫌妻権（けんさいけん）について

かくし女、というのはあるが、かくし部屋、というのは、世間にあるのだろうか。井村がそれを思い立った直接のキッカケは日曜の掃除機である。

井村は日曜は朝寝を楽しみたいと思っている。しかし妻の克子は日曜の朝も早くから掃除機をかける。井村はあの音に弱いのだ。身近でやられると世がはかなくなってしまう。

「日曜は掃除せんでもええやないか」

といったことがあったが、

「そんなことでけへんわ！」

と妻に一蹴されてしまった。

克子は一蹴するのが好きな女である。井村は内心、ひそかに、

（一蹴女史）

と名付けている。これは小説好きな井村が一葉女史にちなんで名付けたのであるが、克子は文学などに縁遠い女であるうえ、そのアダナは井村の内心の声であるから、克子に知れるわけはない。

掃除機だけではない。克子は何によらず、手荒な音を立てて平気な女である。散らかった座ぶとんをまとめ、それを別のところへ、

「どさッ」

と置く。一枚ずつ、

「ぼん！　ぼん！」

と投げつけていくこともある。そのたび井村は脅えてしまう。何かまた克子が怒っているのかと思う。台所で皿ややかんがガタピシと置かれる。何か井村にあてつけているのかと戦々兢々とする。何かにつけてビクッとしつつ、それでも結婚以来、十六、七年たってしまった。

だから馴れそうなものであるのに、かえってこの頃はますます、妻のたてる物音が気に障り、耳につき、いらいらしてくる。

どさっ、ぼん！　ぼん！　ガタピシ！

そのあいまに、

「そんなことでけへんわ！」

「そんなはずないわ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の一蹴である。
井村は、克子が物音をたてて平気なのは、乱暴というより、耳がすこし遠いのではないかと気付いているが、これもいつかそう訊いてみると、
「そんなはずないわ！」
と断固としていう。
断固と一蹴が好きなのは、克子の気持が狭いからだろうと井村は思う。（そうだろうか？）（もしかして？）という、立ちどまって内省するとか、ひるむ気持が克子には全くない。
だから「！」がいつも語尾につくしゃべりかたになる。
「どいて、そこ！」
「ホラホラ、灰皿、灰皿！　灰がこぼれてる。もう！　いいかげんに煙草やめたら!?　肥満と煙草は無教養のシルシ、とこの間、週刊誌に出てたわ。意志力のよわいのを曝露してんねんて。ええかげんにやめなさいよ！」
ほっといてくれ。
何が無教養のシルシや。
近頃、太り肉（じし）の井村は内心そう口答えするが、これも内心の声で克子には聞こえないわけである。だから克子はそれとも知らず、いら立たしげに掃除機で畳をこすってゆく。
井村は克子の指図がましい物のいい方にいつも腹を立てているが、いちいち口に出して咎め立

てはしない。会社の同僚の滝川などであると、ロマメな男だから、
「そのモノのいい方はなんや！」
ときめつけるかもしれないが、井村はもはや黙っている。
そして井村にいわせれば「黙りこくってる」男の怖さを、女はもっと知るべきだと思うのだが、克子は、井村が黙ってるのは、妻のいい分を「ご尤も」と認めているからだと思いこんでいるらしい。
「下着、洗うからみんな脱いで！　御飯、早く食べて下さいよ、片付かないから！」
高一の息子と中二の娘はまだ眠ってるらしい。二階は静かである。日曜は、子供たちは朝食を摂らない。眠っていなくても父親と顔を合すのが嬉しくないらしい。克子とはしゃべるが、父親の井村に親しむ、ということは少いのである。
井村も食欲がない。しかし要らないというと、
「食べなさいよ！　ふだん、ろくに食べてないくせに。酒ばっかり飲んでるやないの！」
と一喝される。
しかし井村は妻の料理にこの頃はますます馴染めない。井村は薄味の京風が好きだが、妻は濃い辛い味付けが好きである。そしてそれをいうと、
「このほうが美味しいやないの！」
と断固、一喝する。それは克子の実家の母親の味にちがいない。おそろしいことに、息子も娘

も、克子の濃い味、辛い味つけに舌が慣れているらしい。井村ひとり薄味がよい、といっても通らないのである。台所などにいて克子はときどき、娘相手にしゃべっている。
「お袋の味、とよくいうのは女房のお袋のことなんよ、みさ子もお嫁入りしたら、この味で、旦那さんに食べさせなさい」
「へーえ、お袋の味って、お嫁にいった先のお姑さんのことじゃなかったの？——そうか、女のほうの味のことなのねえ」
何を教えとんねん、と井村は内心、文句をいう。
妻の克子のいやなところの一つに、わざとらしさ、というのがあり、克子は井村が聞いているのを知っていて、聞こえよがしにいう。
「それにねえ、女が男の人におよめにもろてもらう、というのもマチガイ」
「どうして？」
「そうでしょうが。こっちが男の人の少いサラリーをやりくりしてあげるんです。男の人が『どうかやりくりに来て下さい、お願いします。ゴハンもつくれません、風呂も沸かせません、身のまわりのこともできません、どうかたのみます』というから、女は結婚したげるのです」
「ふーん」
聞いてる井村は腹が立って目の前が暗くなる。娘は無邪気に感心しているが。
もうダメなのである。何を隠そう、井村は妻がキライなのだ。

キライだから、正面切ってケンカもできない。ほんとにキライならケンカもしたくないものである。

克子のそばにいて井村はくつろげたためしがない。掃除機で追い立てられるほかは、こういうあてこすりを聞かされたりする。

「だから結婚、というのは、女が男を選ばなあかんのよ、男が女を選ぶ、いうのは、あれはマチガイ——今まではそうやったけど、これからは、女が選ばなあかん時代なのよ」

克子は説教調でモノをいうのが大好きな女である。子供にならいいが、井村にもそういう口調でモノをいい、まるで上司に説諭されてる気になる。井村は（くそ）という気になる。

そういう女が提供してくれる食事など、井村は美味しく思えない。のみならず、この頃ではもはや、克子の容姿も気に入らない。なるべく視界に入らないように新聞なんかで遮ったりする。克子は四十一になる痩せぎすな毛深い女で、かじけたように顔が小さい。色黒で総体に小柄な女である。

しゃがれ声で、いつもクリームくさい。

この、クリームの臭いにも、井村は辟易する。漬物や果物にもどうかするとクリームの臭いが移っている。

「臭い気がする。クリーム臭いことないか」

とつぶやくと、

「そんなはずないわよ、ほら！」
と井村の鼻先へ拡げたてのひらを押しつけて、臭いを嗅がせようとする。その手は小さく、枯れモミジというところである。
克子は未熟児で生れたそうである。しかしほかの兄妹よりずっと健康で、カゼ一つ引かずに育ったと、克子の母が見合のときに自慢していた。
井村の母は、
「そういうたら、月足らずらしい、小さい人やな」
と克子のワルクチをいい、縁談には気乗りしなかったのであるが、若い頃の井村は小柄で痩せた克子が可憐に思われたのである。井村も背の高い方ではないので克子と釣り合う。それに克子のはにかみ笑いも内気にみえ、手なども子供のように小さく華奢なのが、可愛くみえた。「モミジのような手」というのは、こうもあろうかと思われた。薄桃色で小さくて、爪なんか、桃色の米粒のように輝いていた。
そうして結婚して十六、七年たつと、モミジの手はそれなりにこわ張って、骨っぽく筋が浮き出、枯れモミジになっている。
しかも指の力が強い。
壜の蓋でもワインの栓でもひとひねりでたちまち開けてしまう。その手で、
「どさっ、ぼん！　ぼん！　ガタピシ」

と物を投げたり置いたり、するのである。恫喝的な力を秘めた枯れモミジの手である。
それを井村の鼻に圧しつける。井村にはクリーム臭、というより、老婆臭、という感じがする。
「臭う？　臭わないでしょ。ちゃんとよく洗ってますからねッ！」
と克子はきめつけるが、てのひらを井村の鼻に押しあてるという動作に、克子の心理状態が反映しているように思われる。克子は夫に親愛を示そうとしているのである。克子はそういう動作をして、ちょっと首をかしげ、井村をのぞきこむが、井村はその妻の笑顔を見て、寒気がする。井村は妻をキライなのに、妻は必ずしもそうではないらしいのだ。
双方が、嫌っていればコトは簡単なのであるが。
世の中に双方好きという、ほんとに仲のいい夫婦なんているものであろうか？　井村は夫婦ほど外から見て分らないものはない、と思っているのだが、滝川などにいわせると、
「そら、天皇はんと皇后はんぐらいちゃうか、あしこは夫婦ゲンカのたねもなさそうにみえるしな」
といっている。この滝川は同期で、庶務の課長である。
しかし井村の思うのに、ケンカのたねがなきゃいい、というもんじゃないのだ。要は周波数というか、波長というか、そういうものが合うか合わないかであろう。
ケンカしても仲のいい夫婦はあるのだから——。
現にこの滝川など、花々しい夫婦ゲンカをやるそうで、わりにオープンに妻のワルクチをいう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com